

学校名	さっぽろしりつにじょうしょうがっこう 札幌市立二条小学校	校長名	おおまき しんいち 大牧 眞一
所在地	〒060-0062 札幌市中央区南2条西15丁目	TEL	011-261-6596
		FAX	011-261-5762
		URL	http://www.nijo-e.sapporo-c.ed.jp/

1 研究主題

自分のよさ（キラリ）を磨き、
自信をもって追究する子の育成

2 研究の期間

平成28年度～令和2年度 5年間

3 研究の目的

子どもを運動に誘う教材の工夫や環境づくりを図ることで、自ら運動に働きかけ、体を動かす心地よさや運動の楽しさを味わい、めあてをもって追究するたくましい子を育む。

4 研究の方法・実践内容

(1) 研究の方法

本校は長年に渡り体育科の研究を進めてきているが、特に平成28年度からは、主体的に運動に関わる子を育むことを重点とし研究を進めている。平成29年度には第17次教育実践発表会を開催し、研究の方向性について全道の参会者から示唆をいただいた。平成30年度は、札幌市教育委員会からオリンピック・パラリンピック実践事業校に指定され、生涯スポーツを見据えた研究を進めている。

さらに、令和元年度となる今年度から2年間は、国立教育政策研究所から委託された教育課程研究指定校事業を研究の中心に据えて、研究を深めている。大学関係者や学校医等医療関係者、札幌市教育委員会指導主事、体育研究団体などで構成された検証改善協力者による会議を設定し、子どもを運動に誘う教材の工夫や環境づくりを進めている。来る令和2年度には、第18次教育実践発表会を開催し、研究の成果を全国の参会者に発信するとともに、研究成果の是非を問う。

(2) 実践内容

① 体育授業による実践と検証

ア どの子も楽しみ、活躍できる教材化～第3学年「ネット型ゲーム」フロアボール～
柔らかい大きなボールを床に転がし、相手コートに弾くゲームを行った。空中にあるボールを操作するよりも、抵抗感が少なくネット型ゲームの特性に着目できると考えた。楽しみながらラリーを続ける姿や相手コートに思いっきりアタックを返す子どもの姿が見られた。また、技能を「受ける」「ねらう」の2つに絞って学習を進めることで、どの子もルールや役割を理解し、ネット型ゲームの本質に迫ることができた。

イ 思考力・判断力・表現力を育む学び合い

ICTを活用して、自分たちのゲームの様子を見る場や、個人の課題を友達に伝え、お互いの動きを見合う場を設定した。動きを客観的に見ることで、自分たちの動きを捉え直し、修正することができた。このような場を設定することで、自ら個人やチームの課題を解決しようとする子どもの姿が見られた。

教材の工夫や一人一人が思考・判断・表現する場を設定し、課題を解決していくことで、「分かる」と「できる」がつながり、運動有能感を高めていくことができた。



② なわ跳びの取組

ア なわ跳び検定の実施

委員会活動と連携し、週3回なわ跳び検定を実施した。札幌市教育委員会が推進しているなわ跳びチャレンジカードを活用し、授業と関連付けながら行った。



子どもが自分の伸びを実感し、意欲的に取り組む姿が見られた。また、季節を問わず年中取り組むことができる活動のため、子どもの体力向上にもつながった。

イ ロープジャンプ大会の開催

全校ロープジャンプ大会を行い、学級単位で8の字跳びの記録更新に挑戦する場をつくった。



目標回数を設定することで、仲間と励まし合いながら繰り返し挑戦する姿が見られ、運動に対する意欲が高まった。

③ 運動の機会を保障する「〇〇週間」

非日常的な器械運動に取り組む場を増やすことを目的として、「マット週間」「跳び箱週間」を設定した。

期間中は、休み時間に子どもが自由に使えるよう器具を設置したまま開放した。そうすることで、子どもが進んで運動する機会が増え、学習への意欲も高まった。



④パワーアップキラリンピックの取組

全校で新体力テストを実施し、6年間の記録を蓄積することで、子ども自身が体力の高まりを実感できるようにした。また今年度は、運動に対する意識調査を行い、子どもの実態分析を進めていく。

⑤運動意欲を喚起する環境と教育課程

ア 音を鳴らしたくなる「ジャンプでポン」

校舎内の壁に、叩くと音が鳴る板を吊した。高さの異なる板をいくつか設置して、跳ぶ活動が苦手な子どもも取り組めるようにした。子どもは、自分でジャンプして音を鳴らす教材の面白さを感じ、くり返し取り組んでいた。



イ 投げたり蹴ったりして遊ぶ

「ストラックボード」

1から9の番号が書かれた大きな板を設置した。子どもは、それらの数字を的にしてボールを投げたり蹴ったりして楽しんだ。



仲間と相談して、ルールを工夫しながら取り組む姿が生まれた。

ウ リズム跳びや工夫を促す「けんけんぱ」

校庭のアスファルトに、けんけんぱのマークを付けた。子どもは、休み時間だけでなく、登校時や下校時にもくり返し取り組んでいた。また、跳び縄を使って前跳びをしながら跳ぶ子が現れるなど、工夫して楽しむ姿が生まれた。



今年度はラダーも作成し、遊びを工夫して楽しむ子どもの姿をさらに引き出していった。

エ 遊ぶ時間を保障する「ロング昼休み」

子どもの遊ぶ時間を確保するために、普段よりも休み時間が長いロング昼休みを設定した。雲梯やジャングルジムをくり返し使用し、活動にたっぷり浸る子どもの姿が見られた。



⑥健康と関連した実践

ア 食育

子どもの「食」への意識を高め、体づくりの基礎を育むために、栄養教諭の専門性を生かした食育に力を入れた。



食生活と運動との関わりについて、主体的に学ぶ子どもの姿が見られた。

イ 歯磨き指導

子どもの健康への関心を高めるため、全学級に歯ブラシケースを設置し、給食後に歯を磨く時間を設定した。

鏡に映る自分の歯をじっくり見ながら、丁寧に歯を磨く子どもの姿が見られた。



5 研究の成果

(1) 子どもの体力向上と自己肯定感の高まり

できそうでできない、もっと工夫したくなるといった魅力あふれる運動を教材化することで、新たな課題を見出し、何度も挑戦したり工夫しようと考えたりするなど、自分の動きや運動の行い方を主体的に追究し、目標を達成して自信をつけていく子どもの姿が見られた。

また、平成29年度及び30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果から、実技については、男子は全ての項目で全国平均を上回り、女子は一部項目で上回った。

意識については、「運動・スポーツが好き」と答えた男子児童の数の割合は、以下の結果が得られた。

設問	年度	好き やや好き	きれい ややきれい
運動やスポーツをすることは好きですか	28	93%	7%
	30	100%	0%

平成28年度と比べると、平成30年度は「好き・やや好き」の子どもの割合が約7%伸びていることが分かった。「キラリンを磨き自信をもって追究する子の育成」を掲げた本研究の目的や内容、手立てが、運動に関する子どもの自信を育む一助となったと考えられる。

(2) 教師の授業力の向上

子どもの課題意識を大切にしたい課題探究的な授業研究は、体育授業の充実はもとより、他教科における授業づくりの視点にも転化され、全職員の授業力向上につながった。

6 研究の意義、発展性

子どもが「自然と」「進んで」取り組み、運動の楽しさを感じる教材の工夫や環境づくりは、子どもが自信を深め、生涯に渡って運動に親しむ素地を育むことへとつながったと考える。

今後は、国立教育政策研究所から委託された教育課程研究指定校事業を中心に据えて研究を深める。具体的には、以下のような視点を設け、授業実践を通して検証を進めていきたい。

- ・体育科における思考力・判断力・表現力等を高める主体的・対話的で深い学びの在り方と、その評価についての研究
- ・体育科と体育科以外の教科及び体育的行事を関連させ、地域人材等の活用を位置付けたカリキュラム・マネジメント